

# 地域学試論(その1)

経験的事実と全体の先取り

Preliminary Essays on Regional Science

(Part I)

田中 忠治

TANAKA Chuji

## はじめに

この地域学試論は、約半世紀に亘る私のタイ研究の総括であり、私の研究史といえるものである。

この半世紀、タイにはいろいろな事件が起こり、タイ社会は激しい動きを見せた。1950年代末サリット・タナラット元帥がクーデターで政権を奪取し、軍部独裁政治が始まった。1960年代にタイの国家社会経済開発計画が始まり、経済開発が本格化した。1970年代には産業投資奨励法にもとづく日本の企業進出が過剰となり、反日運動が起きた。また長年続いた軍部独裁政治が学生決起によって崩壊して、民主政治が始まった。1980年代には輸出主導型経済政策によって農業国から工業国へと変わり、プラザ合意後の為替調整を機に発生した直接投資ブームに乗って、著しい経済成長が見られたが、経済のパブル化が起こった。1990年代に入って、それが通貨危機を招き、経済成長は止まった。2000年代になっても、いまだにその危機から脱し切れていない。

確かに、タイ社会は激しい動きをみせた。しかし、それはあくまで表面的な動きであったのではなからうか。タイ社会の構造、システムの変革を伴うようなものではなかった。このような見方に対して、タイは変わったと反論があるかもしれないが、こういう見方もあるということでご容認いただきたい。

これから紹介しようとする私の地域学への試みは、この半世紀、激しい動きの底流をなしてきた、タイ固有の伝統的な社会システムの変わらざる姿を提示しようとするものに他ならない。聞きなれない地域学という視点からの考察であって、まず、私が考える“地域学”なるものについて、少し説明しておく必要がある。

私は、地域を有機的組織体(システム)と捉えて、地域を構成する諸要素の相互依存関係に見られる斉一性、規則性(諸要素の相互依存関係を条件付けているもの)を究明して、地域全体の把握しようとする学問、それが地域学であると考えている。

すでに“私の地域学”については、本紀要の創刊号で詳述しているので、ここではその概要だけを触れておくことにする。私の地域学は、まず、地域をそれぞれ固有の性格を持った主体と捉え、それぞれの地域の特殊性(あるいは個別性)を重視することから始まる。特殊性を有するからといって、地域それぞれが分離、隔離された存在と見ているわけではない。特殊性を有するとはいえ、地域はそれを包括する全体(より広い周辺=例えば日本の中の、さらには世界の中のというような型)があつての地域であつて、普遍的(周辺諸地域と共通的)側面を常に何らかの形で持たざるを得ないのである。

それで接近方法としては、地域の特殊性と普遍性の両面から行う必要があると考えている。地域の特殊性への接近は、地域で生起する社会事象(問題)を、経験的、体験的に先取りし

た全体と関連づけながら多面的、統合的に究明し、社会事象の相互関連性を究明するという方法で行えると思う。一方、地域の普遍性は、他の地域と共通的ないろいろな制度に見ることができる。地域の普遍性面への接近は、それら制度と地域の特殊性との関わり、つまり主体である地域が自らの特殊性で、制度の普遍性をどのように吸収、融合しているかを究明するという方法で行えるのではないかと考えている。この特殊性と普遍性の両面の考察を通じて、最終的に、システムとしての地域の全体像に迫れると考えているのが、私の地域学の方法論である。(注1)

この方法論は、二つの段階に分けられる。第一段階は、地域で生起する社会事象(問題)を、経験的に、感性的に先取りした全体と関連付けながら多面的、統合的に究明する作業段階である。そして、第二段階は、第一段階の研究経験を積み重ねるとともに、地域の特殊性と普遍性の関わりを考察することによって、地域を構成する諸要素の相互依存関係の規則性、法則性を探究する作業段階である。この地域学試論では、このような段階を踏んで論を展開して行きたいと考えている。

地域学が、このような段階を経て行わなければならないのは、既存の学問のように確立した普遍的な体系的理論を持たないからである。地域学は、普遍化的な認識では真実を追求できない対象に対して、個別化的に行うとするものであれば、それは当然と云わなければならない。地域学は、地域全体を仮説的に設定(先取り)し、その地域で生起する現象=問題をそれに位置づけて究明し、その仮説を検証して行く学問と云うことが出来る。したがって、対象とする地域(意味ある地域)をどこに設定するかによって、地域全体の仮説は大きく変わってくるし、また、観察者の視点(社会認識の立場)によっても、その仮説は変わってくる。

私は東南アジアの一国タイを取り上げて研究の対象としてきている。つまり国レベルの地域、それも発展途上国を対象にしての地域学ということになる。これまでの研究では、タイという全体の真実体を把握するまでは至っていない。現在も地域全体を自分なりに措定し、タイで発生する個々の事象を、それに当てはめながら、多面的、総合的に考察して、その措定した仮説を検証する作業を積み重ねている。

現時点で地域学の成果を提示するとすれば、タイという地域で現実に生起しているなんらかの問題を取り上げて、「仮説的に地域全体をこのように設定すれば、このような現実問題はどのように認識できる。」という型で、全体の仮説と現実問題をセットにして提示するしかない。その提示した現実問題に関する分析が、どこまで論理的に説得性、普遍的妥当性を持ち得るか、また、今後の時代的検証に耐え得るかということ、仮説の正当性を問うということになる。

このような地域学で問題となるのは、先ず、その全体としての地域をどう措定するか、つまり全体像の仮説を設定するかということである。われわれがある地域を観察しようとする場合、その直接対象となるのは個々の社会事象であって、決して全体ではない。また、個々の事象をいくら寄せ集めてみても全体は現れてくるものではない。全体は観察者によって大まかに先取りされるしかないのである。

観察者が地域の大まかな全体を先取りするに当たっては、観察者がそれまで蓄積した対象地域に関する知識や観察者の社会認識の眼も、確かに大切であるが、基本的には、その全体は、観察者が事象の発生している現場に身をおいて自らの感性、直感(五感を駆使して)によって、大まかに先取るしかない。地域学において現地体験、フィールド・ワークが欠かせないのは、そのためである。

今回の地域学試論(その1)では、私がタイという国を対象としての地域学において、どのような経験的事実を踏まえて大まかな全体を先取りし、それに社会事象をあてはめて多面的な考察を試みようとしてきたかを、先ず紹介することにしたい。それと合わせて、私が地域学なるものを模索するようになった過程を紹介できればと考えている。これから見ようとするのは、先ほどの地域学の作業段階からいえば、第1段階ということになる。

(注1)地域学およびその方法論の詳細については、本紀要別掲の拙論「地域学とそのカリ

キュラム化」を参照していただきたい。

### 私の経験した事実

私の地域学への出発は、対象とする地域に身を置いて、そこに住む人々の生き方、生活の仕方から、感性的、感覚的に大まかにタイという社会はこのような社会ではと考えることから始まった。

私がタイに身を置く機会を得たのは、1962年アジア経済研究所からタイへ留学した時であった。その当時、私の感性が捉えたタイ社会に生きる人々の生き方、生活の仕方の断片を帰国後、エッセーとしてまとめ、アジア社会問題研究所の月報「アジアと日本」に10回にわたって連載させていただいているので、その中から何編かを紹介したい。これらは、タイの現状を説明しているのではなく、私がタイという地域全体を大まかに先取りするにあたって、参考にしたかつての経験的事実であって、必ずしも今日のタイと一致していない部分があるかもしれないので、予めお断りしておきたい。

#### 1) 「苦しめない貧困」

1962年、初めてタイに渡った。その当時、私はタイの農家負債問題に強い関心を抱いていた。世界恐慌の影響が東南アジアに波及した1930年代、タイの農家負債は社会問題となっていた。それが、第二次大戦後になっても、一向に解決されず、深刻な農村問題であることを、いくつかの調査報告が明らかにしていたからである。

タイに行けるとなった時、なにはさておき、農村に入って、農家負債の実態を探ってみようと思案した。当時の私は、商人兼高利貸の徹底的収奪によって、悲惨な生活を送っている農民達の姿をあれこれ頭に描いていた。娘を売春宿に売り渡し悲嘆にくれている農民、女工哀史にみるように幼い女子を働かせ、その収入でなんとか生きる暗い顔をした農民などが頭にあった。そして、学生の頃、経済学教科書で見た「資本主義的発展の初期段階においては、商人兼高利貸が商品流通過程に吸着し、農民は彼らへの隷従を強いられる。」という一節が、農家負債を考えるにあたってのシェーマとして頭の中にあった。

私が初めて訪れた農村は、バンコクにほど近い、運河による交通が発達し、商品経済化が進み、負債農家が多いと報告が指摘されている地域であった。

この村に足を踏み入れた時受けた衝撃は、今でも忘れない。そこには悲嘆にくれる農民もいなければ、暗い顔の農民も全くおらず、南国の青空のように明るい、天真爛漫な農民ばかりで、私の想像とは、あまりにもかけ離れていたからである。零細な農家を訪ね、どの位借金があるかと聞くと、額は分からないが一生かかっても払い切れないのではと、笑いながら答え、金貸を始めるのなら真っ先に自分に貸してくれとなんのくったくもなくいう。「借金苦で自殺」という新聞の見出しを見慣れている日本人にはとても理解できることではなかった。

利息は、どの位とられているかと聞いても、知らないという。稲の栽培期に、金や品物を借りて収穫期に籾で支払う、青田貸し的な方法で借りているので、現金と利息の区別がつかないのである。農民達からその時知り得たのは、借金の額や利息の率ではなく、借金がどの位あると、利息が幾らであろうと、彼らは苦しめていないという事実であった。

金や品物を貸してくれる華僑商人について聞くと、悪口を言う人はいない。借金を苦しめないのが当然のことながら、商人兼高利貸である華僑商人へのうらみ、つらみが全く聞かれず、それを期待していた私は、完全に裏切られた。子供の学用品から、食料品、日用雑貨まで、現金がなくても貸してくれる華僑商人は、感謝こそされ、非難される対象になっていないのである。

商人兼高利貸への怒りを抱いて、農村に乗り込んだ私は、完全にはぐらかされた感じであ

った。それでは気がすまない私は、商人兼高利貸である華僑を訪ね、調査報告で見た年利で最高250%という高利を例にあげ、何故、こんな高利を農民から取るのかと、彼に言い寄った。彼は、さも当然の如く、危険負担をして貰っているだけだという。貸し付けている地域が広く分散していて、毎年、必ずどこかで凶作に見舞われ、物が受け取れないところがあるので、その分を全員に負担して貰っているという。

青田貸的方法による貸借では、一年でも凶作に見舞われれば、一生かかっても払い切れないほどの借金が、すぐにたまってしまふ。しかし、華僑商人は、娘を取ったり、家財道具を取ったりして、徹底的に清算を迫るようなことはしていない。「あなたは、高利、高利といって自分を責めるが、一生かかっても払い切れない借金を抱えながら、村から逃げ出して身を隠すような農民は一人もいない。何故か分かりますか。」と、華僑商人は反対に食ってかかってきた。私はその返答に窮してしまった。彼は得意げに、自分と金を貸している農民は、社長と社員の関係で、社長である自分は農民の生活を一生面倒をみ、それに対して社員である農民は、一生働いて生産物を自分に提供し続けるという関係にあって、もし、ここから逃げ出してどこかへ行ったら、直ちに食えなくなることを農民自身が一番よく知っているからだという。

この渡タイして最初の農村調査で、私の“農民は隷従を強いられる”というシェーマは、あっけなく崩れさった。後に、私は単一の学問分野からのタイ社会への接近を止め、社会の総合的把握に関心を持つようになるが、この農村での調査が、その大きな契機になっているように思う。(注1)

## 2) 「通用しない一物一価」

二年間の留学という機会を得た私は、当初単身でタイに渡った。家内と子供を呼んで、一緒に生活するようになったのは八ヶ月位過ぎてからである。家内が来て間もなく、二人でバンコク市の目抜き通りの宝石店に買い物に行った。私はタイ社会にある程度融け込み、顔もタイ人の同じように日焼けし、動作もノロノロしてタイ人らしくなり、言葉も買い物には不自由しなくなっていた。家内の方は、日本から来たばかりで、如何にも日本人という感じであった。

男の店員は家内を見て、かなり流暢な日本語で話しかけ、私の方は全然振りむこうともしない。家内は他人に贈る指輪を買いに来たのであるが、幾つもの指輪をショウ・ウィンドーの上に並べ、それについている正札を指さして、“これは安い、買い得だ”と盛んにまくし立てた。家内が欲しいものを選んだ頃を見計らって、私はタイ語で値切り始めた。まず、正札の半額を言った。店員は、それでは赤字になってしまうと言う。そこで少しづつ上乘せして行って、何回かの交渉で値段が決まった。結局正札の、確か三分の二ぐらいの値段だったように思う。

儲け損なった店員は、家内にその指輪を渡しながら、日本語で言った言葉がふるっていた。“あなたのような日本女性が、何故、あんな嫌なタイ人と結婚したのか、日本人の男性にもっとましなのがいると思うのに”それをきいて家内は逆上した。“主人は日本人です”“こんな店では物を買わない”と怒鳴りだした。その場は、店員が平謝りしたので、なんとかおさまったが、その後が大変であった。家に帰る途中も、家に帰っても、腹の虫がおさまらない家内は、私が恥も外聞もなく、あくどく値切ったのがいけないと責めたてた。

私が責められても仕方がなかった。タイ社会では一物一価の法則が通用しないことを教えておかなかつたからである。一物一価の法則というのは、ある時点で、ある物に対する供給と需要が一定であれば、その物の価格は一定であるという法則で、経済学はこの法則の上に成り立っていると言ってもよいような法則である。

近年、タイのバンコクにも外資系のデパートやストアーができ、正札通り物売の所が見られるようになったが、しかし、正札をつけず買い手と売り手の話し合いで物売っている

店や、正札をつけていても、それを単なる飾りもので、結局話し合いで売るといふ店が圧倒的に多い。

タイの商人は買い手の顔を見て値段を決めるのである。店の近所に住み、日々顔を合わせのお得意さんには正札の半値以下で赤字覚悟で売る。近所には住んでいないが、いつも来るタイ人には、半値をちょっと越える値段で売る。通りすがりのタイ人あるいは顔見知りの外国人には三分の二ぐらいの値段で売る。そして、通りすがりの日本人を含む外国からの旅行者には、正札通りの値段で売りつけるのである。ある商店主の話によれば、正札の半値が大体原価で、半値以下は赤字になるが、その分は、外国からの旅行者によって埋めてもらっているという。特に正札通り物を買う習慣がついている日本人は、それを埋めてくれる最高のお客さんになっているようである。

先ほどの事件は、宝石店の店員にとって、家内は最上のお客さんで、正札通り売れると思ったのに、タイ人とおぼしき男が口出ししたために、三分の二の値段になってしまい、その腹いせで、店員が余計なことを言って家内を怒らせてしまったということになる。

また、家内が値切るのを嫌がったのも無理のないことであった。日本人には、物を買う時値切るのは、なにか卑しい、恥ずかしい行為のような気がするし、また正札に書かれている金額以上を支払って、“釣りはいらぬよ”などと、見栄を張って言いたがるのが日本人である。

日本人とは逆に、タイでは値段があっても無いと同じで、値切るのはあたりまえとなっている。物を買う時ばかりでなく、ホテルに泊まるにも、本を買うにも、タクシーに乗るにも値切るのである。初めて外国旅行に出たというタイの高級軍人が日本に来たとき、デパートで買い物につき合ったが、何を買うにも値切れという。私は恥ずかしくて値切れないので、女店員を物陰に連れて行き、自分の金を出して、領収書を二枚に分けてもらい、一枚を彼に渡して、いかにも値切ったふりをしたことがある。彼はいたってご満足のようであったが、家内に責められた時とこの時ほど、この慣習の違いをうらめしく思ったことはない。

“市場倫理は非情”といわれる。非情なるが故に合理的であり、またそれ故に市場のメカニズムは人間を疎外して働き続けるのであろう。一物一価の通用しないタイ社会の市場倫理は、顔がものをいう有情的で人間味が濃く、非合理的である。それでは、ここでの市場のメカニズムは、誰が、どうやって動かしているのだろうか。(注2)

### 3) 「誰のための経済開発」

何度かタイを訪れ、首都バンコクと農村を往復して調査した。その度ごとに感じたことは、どうしてこれ程の差異があるのだろうか、ということであった。

バンコクには立派な道路が走り、近代的ビルが立ち並び、軒を並べた商店には高級商品が陳列され、小ざれいな洋服を着た人達が、そこを行き交っている。そして、夜ともなれば、道路は街灯で照らされ、派手なネオンがそこそこに輝き暗い空を赤く染めている。

バンコク郊外を30分車を走らせると、バンコクと全く対照的な貧しい農村にぶつかる。ニッパ椰子の葉でふいた屋根の高床家屋が散在し、家財道具らしい家財道具もない家をのぞけば、腰布一枚で薄暗い竹製の床で寝ころんでいる男が、うさん臭さそうに頭だけもたげて、あいさつする。周囲の田圃では、子どもたちが裸で水牛の背に乗って遊び興じている。そして、夜ともなれば、薄暗いランプが家の存在を示すかの如く各家にとり、家々を結ぶ歩道は、夜のとばりの中に完全に消え失せている。この都会と農村の対比から、タイには二つの社会、二つの文化があるとさえいう人がいる。

タイの人口構成でみると、人口の8割以上が農村で生きている。都会で生き、物質文明の恩恵を受けて豊かな生活をしているのは、全人口のたった2割近い人に過ぎない。現在、政府の発表によれば、農村人口の平均所得は、都市人口のその10分の1で、その差はますます拡大するであろうといっている。

1961年以来、タイ政府は経済開発計画を作り、国民所得の向上をうたい文句にして諸外国から多額の援助、借款を受けて実施して来ている。あまりにも、かけ離れたバンコクと農村を往復する度ごとに、この経済開発計画は誰のためなのだろう、8割以上の人口を占める農民の生活が向上せずに経済開発があるのだろうか、さらには開発計画の効果が、どうして農民にまで及んでいないのだろうか、考え込まざるを得なかった。

東北タイへ協同組合調査に行った時、計画効果が農民に及ばない原因の一つを、私は見いだした。タイの協同組合は官設で、その末端の管理、いふなれば組合と農民の接点となっているのが県組合事務所である。その中の一つ、ウドーン県事務所を訪ねた時である。事務所の門を入ると直ぐそこに10坪ほどの平屋の木造建物があった。なんの気なしに鉄格子のはまった窓をのぞくと、蛍光灯が2本あるだけで薄暗く、年老いた紺の野良着を着た農民が20人ほど、椅子一つないコンクリートの床に立膝で座っており、その前に若い役人が小さな机を置いて腰掛けている。その役人はカーキ色の制服に身をかため、薄暗い中でサングラスをかけ、金色の大きな腕時計をちらつかせながら、(それらは当時役人のステータス・シンボルであった) 乱暴な口調でわめいていた。その役人の横柄な態度は、見ていただけでも不快であった。折角来たのでそのまま帰るわけにも行かず、話が済むまで待って彼と会った。私がかつて知っていたのを知っていたのか照れながら、“組合が配布した肥料が町の店に流れているので、組合長を集めて問いつめていたのだ”という。そして吐き出すように“馬鹿な農民とつき合わなければならない田舎は嫌いだ。早くバンコクへ帰りたいよ”といった。そこには農業開発への使命感、農民への同情のひとかけらもなかった。

私がかつてこの事務所を訪ねた目的は、協同組合の実態を見ることにあった。どこか一ヶ所でもいいから見せてくれと頼んだ。彼は怪げんな顔で、“それはくだらない。自分もここへ来て三年になるが、一度も村に入ったことなどない。所長は七年になるが、そんなことはしていない”と村などに入るのは全く不潔極まるという口ぶりで、私の申し出を断った。これを聞いて、私は自分の耳を疑った。タイの開発計画では、協同組合は計画効果を農民に及ぼす重大なパイプとされ、農業開発の柱とされていたからである。

私がウドーンで見た協同組合の役人は、農民を蔑視し、農村に行こうともせず、事務所でふんぞり返って何か用事があれば農民を呼びつけ怒鳴っている役人であった。そのパイプは完全につまっていた。計画効果が農民に及ばないのは当然であった。

私は、かつて読んだアメリカ人の論文の中で見た“東南アジアが経済発展するのは、役人が農民と一緒に泥にまみれて働く時であろう”という一節を思い出しながらウドーンを去った。(注3)

#### 4) 「恐れられる役人」

私はタイで実態調査をする際、必ずなんらかのおみやげを持って、その地区の警察署長を訪れ、滞在許可を求めることにしている。

タイ北西部、ビルマ国境の町へ行った時もそうであった。片田舎で、外国人の訪問など受けたことがなかったせいか、また私が持っていったスコッチのせいか、その警察署長は大変な感動ぶりであった。その翌朝、彼は署のジープで、銃を持った警官一人を引き連れて、私の宿舎を訪れた。このジープと警官を使ってくれという。ジープは使わせて頂くが、警官はいらないと固く辞退した。しかし、どうしてもとねばるので断りきれず、警官と一緒に調査をすることになってしまった。私はタイで何回も農村調査を行ったが警官の護衛づきでの調査は、後にも先にも、この時だけである。

この護衛づきの調査は、完全に失敗であった。庭先の農家の人達は、われわれ二人の姿を見ると家の中に隠れて出てこない。田畑で農作業をしていて、隠れ場の農民は、声をかけると、ひれ伏すように身をかがめ、ただおびえた眼差しで見つめるだけで、何を聞いても答えようとしない。私は、それまで多くの農民と接してきたが、これほど農民から冷たい仕打ち

を受けたことがなかったので、思わず私は同行している警官の顔を見てしまった。小柄な貧弱な体で銃を重そうに持ち、人のよさそうな顔をした中年男が、微笑みを浮かべて立っているだけで、何故われわれをこんなに恐れるのか一瞬いぶかったが、直ぐわかった。彼の着ているカーキー色の官服に恐れ、おののいていたのである。一般にタイ農民は役人を恐れているのは、話に聞いていたが、目の前で見たのは初めてであった。

調査は失敗に終わった。農民が如何にカーキー色の官服を恐れているのかを目の前で見たのは貴重な体験であった。

この時の体験から、何故、かくも農民たちはカーキー色の官服を恐れるのかという疑問が、私の頭から離れなくなってしまった。それ以降の調査で、機会をみては、その疑問を解こうと農民に尋ねた。

バンコク近郊の稲作農村で聞いた話は、強く印象に残っている。官服を着た人達は、なんのとがを受けることなく人の命を奪うから恐れるのだという。その一例として、こんな話をしてくれた。官吏、警官が好ましからぬ人物と思えば、彼らはある事件をでっちあげ、その人を犯人として捕らえる。そして、夜半、留置場から連れだし、舟に乗せて運河に出る。運河の土手に警官を配置しておいて、舟が通りかかった時、空に向かってピストルを乱射させる。それと同時に、舟に乗っている警官が縄でしばられているその人物を射殺し、その死体を運河に放り込んでしまう。官吏、警官にとって好ましからぬ人物は、かくて、この世から消え失せる。翌日、死体が運河に浮かんでいても、昨夜、犯人護送中、犯人の仲間とおぼしき者が、犯人の奪還を試み、ピストルを乱射して襲って来たので、止むなく射殺したといえ、全てが済んでしまうのだという。

農民がカーキー色の官服を恐れるのは、このような現実からであろうことは疑うべくもないが、その恐怖心がもっと長い歴史に根ざしたものであることを、タイ字紙（1971年）に掲載された共産ゲリラからの手紙が教えてくれた。

「私が小さな子供の頃、30年も前のことですが、“ナーイ・マー”（ナーイは役人、マーは来るの意味）と誰かが脅かすと、最も安全な場所へ走って逃げ隠れたものです。……ナーイというのは官服を着た人達の総称です。……われわれが、これほどまでにナーイを恐れたのは……何世代も前から、ナーイといわれる人間は魔力、法力を身につけていたからです。……特に重要なことは、あの人達は人を拷問したり、撃ち殺したりするような全てのことができる権力を持っていたということです。……」と記している。

タイの役人は、タイ語でカー・ラーチャカーンと呼ばれている。カーは下僕の意味であり、ラーチャカーンは国王の仕事の意味である。この文字通り、タイの役人は、今でも絶対王朝下の役人と同様、大衆に対し絶対的権力を握る国王の下僕なのである。彼らは決して公僕ではない。農民が役人を恐れる根本原因は、そこにあるように思う。（注4）

##### 5) 「タイ人とお寺」

タイ人個々人にとって、寺との係わり方はいろいろであろうが、バンコクで生活していた当時、私の最も身近にいた二人のタイ人と寺との係わり方を紹介しよう。

一人は、私の家にいた女中である。私が一軒家で一人住まいをしていた時、先輩が絶対安全、酔っぱらっても“あばたまえくぼ”にならないといって探して来てくれた、折り紙付きの女中である。絶対というだけあって、これほど不器量な女性は、この世にいまいと思われ程の顔であった。そして、おまけに、背が低く、小太りで、ひどい猫背であった。停電になった時、度々、火のついた蠟燭を胸にかかえて、私の部屋まで持って来てくれたが、暗闇の中にぼーと浮き出る彼女の姿は、人間というよりは化け物に近く、いつもぎょっとしたものであった。

この彼女、容姿は誠に悪かったが、心の非常にきれいな人で、良く働いてくれた。私は他の日本人家庭の女中に比べて、かなり高い給料を払ってやった。彼女は、また大変な仏教の

信者で、ワン・ブラ（仏の日＝仏教徒の安息日で週一日ある）になると、朝早く起き、いそいそと寺参りに出かけて行った。

彼女はバンコク近郊の農村の出身で、30才を半ばの年頃で、独身であった。ある時、“お金の使い道がなくて困るだろう”とからかった。すると真顔で“とんでもない、もっと、もっと欲しい”という。貪欲な人だなあと思いながら、何に使うのか聞くと“お寺へ持って行く”という。その時、初めて知ったのであるが、私が払う給料の大半を彼女は毎月寺へ運んでいたのである。私はあきれかえって、その理由を尋ねた。

その答は、あまりにもあわれであった。“私のような醜い女は、嫁にも行けず、一生一人で生きて行かねばならない。醜い姿で生まれて来たのは、前世において、きっと悪業を積んだ報いであろう。現世ではどうしようもないが、来世では必ず美人に生まれ変わりたい。そのために、一生懸命働いてお寺に金を運び、功德を積んでいる”という。確か、生まれ変わる美人の程度として、当時のタイ映画の美人スターの名前をあげたのであるが、それは思い出せない。そして、それにつけ加えて、“お寺に行ってくるとサパーイ・チャイ（こころが安らぐ）になり、一週間楽しく働けるのだ”といった。30才半ばの女性にしてはあまりにも幼稚な話ではあるが、なんの照れもなく、さも当たり前のごとく話してくれた。

もう一人は、私の助手をしていた男性である。彼は、昼間、私の所で働き、夜学に通う苦学生であった。彼は、女中と違って、全くの現世利益で寺とかかわり合っていた。彼は、ある時、数枚の宝くじを買って来た。そして“〇〇寺へ行ってお参りすれば、あたり番号を教えてくださいというので、その寺へ行って教えてもらって買って来た”という。私は、あきれまじまじと顔を見た。至極、真面目なので、からかわないで“それは楽しみだね”と答えておいた。それから何日かたって、ぷりぷりしながら“あの寺はだめだ”という。宝くじが当たらなかったのである。そして、“友達に聞いたら 寺がいいというので、今度は、そこで番号を教えてもらって買うつもりだ”という。私が“もう損するだけだから止めた方がいい”というと、“今度は大丈夫だ”と確信ありげであった。その後、彼は買ったとも、当たったともいわなかった。おそらく、また当たらなかったであろう。

この私の身近にいた二人のタイ人の寺との係わり方は、タイ人一般の典型のように思える。つまり、タイ人は来世への期待と現世利益の二面で寺と係わり合っているのである。

来世期待は、女中の例にみる如く、一生、寺に金や物を献上して祈願し続けていく。現世利益を期待する場合にも同じである。現世利益を祈願する場合、タイ語でボンをするという。ボンというのは、仏だけではなく、神、精霊等に願い事をする時、まず線香を焚いて、自分の願いごとがかなえられれば、必ず贈り物をしますと、報酬を支払うことを約束して祈願することである。願い事がかなえられれば、約束通り、食物やお金を支払う。しかしかなえられなければ、なにも献納しないで、ほかの仏、神、精霊を探して、新たに祈願する。仏、神、精霊の超自然的な威力を物や金で買うのである。合理的といえは合理的だが、お寺と駆け引きするような関係は、私には理解できない。（注5）

## 6) 「温情と服従」

私がバンコクで住んでいた家は、ある区警察署長の家作であった。ある時、雨漏りがするので、家主の家に電話をし、修理をお願いした。その翌朝、真っ赤な車体の上に赤ランプを取り付けた警察の車が、わが家の門前に止まり、制服制帽の三人の警官が案内を乞うこともなく、ずかずかと家に入って来た。私は何か事件に巻き込まれたのかと、一瞬、緊張した。

三人の中の比較的年輩の警官が、“〇〇区警察の者だが、家の修理に来た”という。私はなんのことも分からず、警察に修理を依頼した憶えがないので、ぼかーんとして、その警官の顔をみていた。すると“家主は××さんですね”という。名前を聞いて、初めて事情が飲み込めた。家主の警察署長が自分の家作の修理に、部下の警官を差し向けて寄越したのであ



る。私はどのように対応してよいのか戸惑った。私の返答を待たず、彼らは車を門内に入れ、さっさと車に積んできた道具を下ろし、作業にとりかかった。大工代わりに警官を派遣して寄越すのもさることながら、梯子、道具箱の全てに、警察署名が麗々しく書き込まれており、それでこの家を修理しようとするのである。まさに公私混同の極みである。

警官三人が制服制帽で屋根に上がり、修理箇所を点検している姿は、近所の人達に異様な光景に見えたのであろう。何人もの人が、何か事件かと集まって来た。誠にばつが悪いので、女中に家を修理に来ただけだからと皆に説明してくれと頼んだ。なかなか雨漏りの原因がわからず、屋根から下りて、家の天井を調べ、また屋根に上がるということを繰り返すので、ますます、これは何か事件かと動こうとしない。私は困って、年輩の警官をつかまえ、屋根の上は暑いから上着ぐらい取ったらどうかといった。すると、そんなに暑くないから心配するなという。そういわれると仕方がないので、正直に、制服でいるとこの家でなにか事件があったと思われるので、上着だけでもとってくれと頼んだ。それで、ようやく納得し、屋根上の警官に“服をとっていいよ”と声をかけてくれた。彼は笑いながら、実は三人とも上着の下は裸なので、外国人の家で仕事をするのに裸では失礼かと思い我慢していたのだという。誠に世話のかける大工を寄越したものだと思腹の中で家主をうらんだ。

この大工が、まともな技量を持った大工なら我慢もできるが、三人ともスレート屋根の上を行ったり、来たりしたため、スレートの何枚かが割れてしまったのである。年輩の警官が来て、スレートを取りに署まで二人を行かせたので、少し家の中で休ませてくれという。

私も聞きたいことがあったので、彼を応接室に通し、冷たい飲物を出した。警官達がわが家に現れた時から持っていた疑問を解くため、“警官の皆さんが、何故、私の家の修理に来たのか”と尋ねた。“署長命令です”と何故そんなことを聞くかと不思議そうな顔で答えた。私の質問の意味が分かっていないようなので、再び、かみくだいて、“この家の修理は全く署長の私的な仕事なのに、警官である皆さんが、公務を放って、どうして修理に来たのか”と尋ねた。彼は、さも当たり前のように、“警察の仕事であろうが、署長の私的な仕事であろうが、署長の命令ならなんでもやる”という。“上司の命令なら誰でも同じか”と聞くと、“この署長だけだ”という。その理由を聞くと、“この署長は立派な人で、他人の面倒をよく見てくれる。この間、自分の子供が病氣した時、警察の車で病院に運んでくれ、毎日のように、見舞い品をもって病院に来てくれたし、母親の病氣の時もそうだった。今日、一緒に来ている若い二人は、いづれも署長の世話で結婚し、家の世話までしてもらっている。私たちは署長の命令ならなんでもしなければならぬ”のだという。

警官三人による雨漏り修理は、結局夕方までかかり、夕食をご馳走して、お引き取り願った。一日大変な騒ぎであったが彼らの置土産は大きかった。タイの行政機構では、上司たる者は、温情主義をもって部下に接し、部下の公私にわたる面倒をみることによって、自分への服従を生み出さない限り、その職務を遂行できないということを文献ではみたが、それを見事に実証してくれたからである。(注6)

以上、「アジアと日本」に連載した10話のうちの6話を紹介した。これらに盛り込まれている内容は、全て私が経験した事実である。これらの事実は、いずれもタイという国で起こっていた社会事象であり、タイ人の生き方、生活の仕方の断片を示す事例である。これら個々の事象は、一見すれば、それぞれバラバラで相互の関係がないようであるが、タイという一つの社会で起こっていることであり、それらが相互になんらかの関連を持っているのは間違いのない事実である。この6話に盛り込まれている経験的事実から私が捉えたタイという国(社会)イメージ(大まかな全体)は、次のようなものであった。

- (1) 「苦しめない貧困」から得た印象は、タイ農民はホモ・エコノミクス(経済人)といえるのだろうかという疑問である。ホモ・エコノミクスとは、個人を孤立した合理的な存在とみて、人間は目的合理的に経済活動を行うという見方である。この人間像は、古典派から新古典派につながる経済学を構築するにあたっての基盤となっている。タイ農民が、物質的利害よりも精神的利害によって行動しており、決して

合理的に行動する人間として私の目に映らず、これまでの経済学そのものが適応できるのだろうかという疑問を抱いた。先にも触れた通り、農民の貧困問題を農業経済学の理論的枠組みに接近しようとしていた私の思惑は、この経験によって脆くも崩れ去った。

- (2) 「通用しない一物一価」から得た印象は、近代経済学においては、一物一価の法則が支配する範囲をもって「市場」と定義しているのであるが、タイには近代的な意味での市場が成立していないのであろうかという疑問である。近代市場の倫理は非情であり、非情なるが故に合理的であるが、タイ市場は、顔がものをいう有情的で人間味が濃く非合理的な市場になっている。市場のメカニズムを牛耳っているのは何者かが存在すると思わざるを得なかった。
- (3) 「誰のための経済開発」から得た印象は、官吏と一般国民の間のギャップである。なぜ、これまで官吏は農民を蔑視し、農村を嫌っているのかということであった。当時経済開発が開始された間もない頃ではあったが、計画に盛り込まれた政策を推進する役割を担う農村における官吏の農民に対する態度には、経済開発への意欲は全く見られなかった。
- (4) 「恐がられる役人」から得た印象は、農民が官吏を見る目はどう猛な動物でもみるようで、怯えきっているのはどうしてかということであった。ここでは、タイの旧社会（専制君主制下）における身分階層が、今日も心理的に残っているのであろうということであった。
- (5) 「タイ人とお寺」からの印象は、タイは仏教国であるといわれているが、その仏教の中で、因果応報と徳を積むということが強調されて、それがタイ人の日常生活の中で深く浸透しているということであった。
- (6) 「温情と服従」からの印象は、行政機構の中での公私混同が激しいこと、上司と部下との間の人間関係にみられる温情主義的つながりの深いことであった。

タイ社会の大まかな全体というのは、これらの印象が相互に関連づけられ、矛盾なく納まるような枠組のことになる。私が、このような印象から想定した最初の枠組みは、タイという国は近代国家の装いをしているが、前近代的遺制を多く引きずっている国であるということであった。そして、このように枠組みを設定するとすれば、この社会で生起する現象は、近代社会を対象に構築された専門分化した既存の学問では捉えきれないのではなかろうかと考えるようになった。

この段階では、全体といっても曖昧なものであったが、タイの旧社会を私なりに想定しながら、それを枠組みにして、タイ社会の問題を総合的、多面的に認識、究明するという作業を行うようになった。その作業を通じて得られた多くの断片的なタイに関する知識によって、その枠組みが徐々に固まるようになる。

ここで、その作業の一例として、初めて、タイ社会の問題を総合的、多面的に究明しようとしたタイの農業開発に関する研究を紹介したいと思う。

(注1) アジア社会問題研究所：“東南アジア像を求めて(2) 苦しめない貧困”、「アジアと日本」99号、アジア社会問題研究所、24 - 25ページ、1982年4月。

(注2) アジア社会問題研究所：“東南アジア像を求めて(3) 通用しない一物一価”、「アジアと日本」100号、アジア社会問題研究所、40 - 41ページ、1982年4月

(注3) アジア社会問題研究所：“東南アジア像を求めて(5) 誰のための経済開発”、「アジアと日本」102号、アジア社会問題研究所、30 - 31ページ、1982年6月。

(注4) アジア社会問題研究所：“東南アジア像を求めて(6) 恐れられる役人”、

- 「アジアと日本」103号、アジア社会問題研究所、32-33ページ。  
(注5) アジア社会問題研究所：“東南アジア像を求めて(9) タイ人とお寺”、「アジアと日本」106号、アジア社会問題研究所、32-33ページ。  
(注6) アジア社会問題研究所：“東南アジア像を求めて(10) 温情と服従”、「アジアと日本」107号、アジア社会問題研究所、32-33ページ。

### 先取りした大まかな全体と取り上げた問題(社会事象)

タイ研究にあたっての私の問題意識は、「なぜタイ農民は常に貧しくあらねばならないのか」ということにあった。タイの農業協同組合運動(注1)や農家負債問題の研究(注2)を手がけたのも、そのためであった。タイに滞在して、タイ社会とはこんな社会ではなからうか、大まかに考えるようになり、それにこの問題を位置づけて、多面的に研究し始めた。その当時の研究をまとめたのが、「タイの農業開発 - 開発政策と農村の現状」である。(注3) 私の地域学は、この論文から始まったといっても過言ではないので、その内容を少し立ち入って紹介したい。これは30才代の研究であり、誠に未熟なもので赤面の至りであるが、そのまま紹介させていただくことにする。

私が、この論文としてまとめる作業に入ったのは、1961年、タイで初めての経済開発計画「第一次6カ年計画」が実施され、その前期3カ年計画(1961年-1964年)が終了しようとする頃であった。前期3カ年の実績を踏まえて後期計画を修正するというのが、当初の目標であり、その成果が期待されていた時期であった。

その修正された後期3カ年計画書では、国民総生産で6%、国民一人当たり所得で3%の増加が見られ、計画目標は達成されたとされていた。この論文では、先ず、このようにマクロで所得向上が見られたとしても、計画の基本目標である国民の生活水準の向上は、果たして達成されたと云えるのであろうかと、疑問を提起している。というのは、その当時、国民の約8割を占めている農民の生活が、ますます苦しくなっている事実が明らかになっていたのである。1964年の経済開発省、土地局が中部タイ5県で行った農家経済調査によると、農家当たりの年間総収入は自作農が9,717バーツ、小作農で8,013バーツであるのに対して、年間総支出は自作農が10,898バーツ、小作農が10,566バーツとなっており、それぞれ1,181バーツ、2,503バーツの赤字となっている。農家の平均赤字額は10年前の全国農家経済調査では、639バーツであったのに比べると倍近く増えており、農民の生活が苦しくなっているのは間違いないと思われた。

第1次経済開発計画は、農業立国を前提として、農業開発を最優先していたにもかかわらず、その開発の主体である農民が貧困化の一途を辿っているのが実態であった。このような事実を目の前にして、計画に盛り込まれた農業政策が農村社会に適合したものではなく、停滞的な農村の現状を打破し、農民の生活向上に寄与するものになっていないのではとの疑問を抱かざるを得なかった。計画の基本目標を国民の生活水準の向上に置かならば、国民の80%を占める農民の生活水準の向上なくして目標の達成はあり得ない。このような農民の貧困化という現状認識から、計画に盛り込まれた農業開発政策と農村の現状との間のズレがどうして発生しているのか、この問題を解明しようとしたのが、この小論文に他ならない。

第1次6カ年計画に盛り込まれた農業開発事業計画は、大きく四つの事業に分けていた。

- 1) 農業資源の開発：灌漑施設の拡大、林業、漁業資源の開発、土地開発等。
- 2) 試験、研究、調査：新品種、新畜種の導入、品種、畜種の改良、新農業技術の導入等。
- 3) 普及、振興：農業普及員による直接的普及活動、調査結果の展示等を通じての間接的普及活動。
- 4) 農民の所得および福祉の増進：協同組合、農民会を通じての低利農業金融、土地分配、さらには教育、衛生、運輸通信等の開発等である。

この農業開発事業の内容を見ると、事業計画数および計画別支出額から、1)の農業資源開発(ほとんど灌漑計画)と2)の試験、研究、調査の2事業が重視されているのが明瞭であった。全農業開発事業計画の93計画のうちの61計画が、この2事業が占め、また、支出額の80%がこの2事業にあてられていた。これを見る限り、経済開発計画に盛り込まれている農業開発政策の重点は、この2事業計画にあるとみられた。したがって、農業開発政策と農村の現状間のズレを探るとすれば、このような農業開発政策の重点の置き方がタイ農村の現状に適合したものであるのかどうかを解明することであろうと考えた。

そして手順としては、タイ農村に内在する貧困要因を明らかにし、この政策との適合性を考察する方法をとっている。

私の地域学の原点があるとするのは、この時点で、タイ農村の貧困要因の解明の際に多面的な認識方法をとったということである。本来、貧困という問題は極めて経済的問題であって、経済的要因だけを取り上げれば済む問題であるが、あえて経済外的要因である文化的、社会的要因をも取り上げたのである。これは、私が農村で経験した事実から描いていた全体像=イメージが、前近代的要素が濃く残る社会であって、そこに住む農民は、「苦しめない貧困」でみた通り、経済的利害よりも精神的利害を動機にして動いているのではないかと疑問を持ち、そうであれば、広く文化的、社会的要因をも合わせて考察する必要があると考えたのである。

経済的要因としては、1)小作問題、2)負債と農業信用組織の未発達、3)小規模経営、4)低生産性、5)農民の半失業的状態、6)農作物流通における農民の不利な立場等を指摘した。

文化的要因としては、「人そのもの」すなわち農民の知識、思考、態度等を取り上げ、社会的要因としては、1)農村の社会組織、2)農村の社会環境(公共施設等)を取り上げて貧困との関わりを究明した。

経済的要因については、ここにあげた項目だけみれば貧困との関係が類推可能であるので、その説明は省略することにする。文化的、社会的要因については、貧困とどう結びつくのか、少し説明しておくことにしたい。

文化的要因としては、a)農民の低い知識水準を取り上げ、農民の識字率は約68%という調査結果が出ていたが、そのうち4年制の初等教育だけを受けた者が96%を占めていた。その当時のバンコック銀行の報告書は、「現在の農民の知識水準では、科学書や専門書を読んで、それを応用して伝統的農業技術を改善していくほどのものになっていない」と厳しく指摘していた。先ず農業技術を改善して、生活向上を図るにもその知識修得の能力がないということを貧困の文化的要因としてあげた。b)農民の思考・態度：特に農民自身を貧困化せしめている要因として、次の3点を挙げている。

1) 農民の保守(伝統)主義：タイ農村内の人間関係が伝統への固執を生んでいると指摘した。村内の年長者の伝統的思考が農民全体の行動を規定し、伝統主義、革新の非受容性を生んでいるとみている。

商業、技術労働、肉体労働の蔑視と経済的浪費：タイ人の伝統的価値観において、最高の価値とされているのは「チャオ・ナーイになること」であるとするタイ人社会学者の指摘に注目した。(注4)

2) 彼は、チャオ・ナーイとは旧身分制社会における支配階層(王族、貴族官吏)の総称であるが、身分制度が廃止されている今日も、心理的に受け継がれているという。そして、チャオ・ナーイとして社会的評価を受ける条件は、「手を使っての肉体労働を一切しないこと」、「心が寛大で、金銭的に出し惜しみしないこと」であるという。この肉体労働を一切しないことに価値を置くことから、商人、農民、技術者等に対する蔑視感が生まれ、農民の勤労意欲をそぐ結果になっていると見た。また、金銭的に出し惜しみしないということから、一般に冠婚葬祭を派手にする傾向があり、また贅沢な生活に憧れる傾向があって、これが富の浪費となって、経済発展を遅らせ、負債を増やす原因ともなっていることを指摘した。

- 3) 農民の平穩なる日々への願望：タイ農民の生活は、全て寺を中心に営まれ、仏教は日常生活に深く浸透して、タイ農民の世界観に大きな影響を与えていると見た。仏教の教えの中でも、因果応報の思想は、農民に日常生活で遭遇する諸問題（貧困、病気、死、容姿の美醜、名声、富裕等）は、全て前世における善行、悪行の結果であるという考えを植え付けて、全て自分の行為の結果であると思わせている。このような思想は、諦観的思想と結びつき、現世はなるべく平穩に過ごしたいという願望を持たせるようになってきている。この平穩なる日々は、現状に満足せざるを得ないという諦めに立っての平穩であって、生活向上への意欲を失わせ、無気力な人間を作っていると指摘した。

社会的要因としては、次の2点を挙げている。

- 1) 農村の社会組織：当時話題になっていた、エムブリー（John F. Embree）が指摘しているタイ農村社会の弛緩性（loosely structured social system）（注5）そのものを貧困要因として挙げている。弛緩した組織によって形成される農民の自己主義的、自立的性格が、農民の集団をつくることを好まない性格を生み、自生的機能集団の発生を阻害し、農村社会の変動を妨げていると考えたからである。
- 2) 農村の社会環境：精神的文化側面からの貧困要因と並んで、物質的文化の側面として、道路、水道、通信、電気、市場、学校、病院、その他の公共施設の未発達も貧困要因として挙げている。

このような文化的社会的要因を含めて、タイ農村に内在する貧困要因を指摘した。そして、タイ農民の貧困の根源は生産性の低さにあるのは間違いないが、それを生んでいる要因を二つの側面から指摘した。一つは、小作問題、農業金融組織の未発達、小規模経営、半失業の状態、市場組織の未発達、さらには諸社会施設の未発達という経済的側面である。もう一つは、農民自身の知識水準の低さ、伝統主義、商業および技術・肉体労働の蔑視、経済的浪費、平穩なる日々への願望、集団活動の忌避といった経済外的側面である。

この二つの側面からの要因が相互に作用、反作用して、いわゆる貧困の悪循環を構成し、経済発展を阻害してきていると見た。そして農業開発政策の基本的課題はこの貧困の悪循環を断ち切ることにあり、農業開発は三つの計画で構成されるべきではないかと指摘した。すなわち、農業生産性向上計画（A）、農村社会・経済改善計画（B）、計画効果普及計画（C）である。

まず、貧困の根源である低生産性を改善するため生産性向上計画が必要とされる。生産性を向上するためには、灌漑施設の拡充、肥料の使用奨励、農耕技術の改善、品種改良、農業多角化の振興などが有効な手段となろう。しかし、ほとんどの農家が赤字経営であり、半数以上を占める小作農が債務奴隷的存在であるところでは、肥料、機械の購買力を持ち合わせないし、また、小作農の80%が1年小作である現状では増産意欲も持ち得ない。そして、さらに社会環境の未発達によって、社会そのものが社会変動への適応性に欠けている状況では、近代的灌漑施設、農耕技術等だけを農村社会に持ち込んでも、農民個々人のそれへの順応は難しいであろう。

したがって、生産性向上のための計画（A）の遂行にあたっては、その前提として、農業金融問題、小作問題などの解決と、農村の保健衛生、運輸通信、教育など社会諸施設の開発が必要である。すなわち現在の農村社会、経済を改善し、生産性向上のための諸政策効果を農民が吸収しうる状態にまで、農民の生活程度、環境を改善する計画（B）が不可欠である。また、こういった政策をもつての「上からの」（A）（B）両計画も、開発主体である農民の知識水準、価値観、世界観、社会関係などの文化的要因から、その効果の吸収、消化が妨げられれば、すべての努力が徒労に終わるのである。それで、（A）（B）両計画遂行の前提として、農民の精神面の開発＝人間改造をはかりながら計画効果を農民の手にまでとどかしめる効果普及計画（C）が必要となるのである。

先述した通り、第一次経済開発計画に盛り込まれた農業政策は、（1）農業資源の開発、（2）試験、研究、調査、（3）普及、振興、（4）農民の所得および福祉の増進等の4つの

事業計画を柱にしていた。

この四つの事業を先の(A)(B)(C)の三つの計画と照らし合わせて(1)(2)は(A)の生産性向上計画にあたり、(3)は(C)の効果普及計画にあたり、(4)は(B)現在の低い水準を引き上げるための計画にあたりとみることができる。現実の農業開発計画は四事業で構成されてはいるが、生産性向上計画(A)、農村社会・経済改善計画(B)、効果普及計画(C)の三事業で構成されており、構成としては時宜を得た計画になっており、「全体的構想そのものは基本的に正しい」とみている。

この三つの事業計画で、真の成果を上げるためには、言い換えればタイ農村の状況に見合ったものとなるためには、先述した通り、(A)は(B)を前提として、(A)(B)は(C)を前提とするという三事業計画相互の関係を十分考慮して立案されたものでなければならないのである。つまり構想そのものがいかに正しいものであるとしても、効果普及計画(C)の内容によっては、この政策は現実と遊離したものになる可能性を秘めたものであった。

第一次経済開発計画に盛り込まれた農業開発計画の内訳をみると、事業計画数および計画別支出額を見ると、農業資源開発(そのほとんどが灌漑計画)および新品種、新畜種の導入、品種・畜種の改良、新しい生産技術導入のための試験・研究・調査の二つの事業、すなわち(A)(B)が中心となっており、全農業開発事業93計画のうち61計画を占め、支出額でも80%以上がこの二事業に投じられているのは、先に触れた通りである。

この二つの事業が現実的に成果を挙げ得るのは、(C)の効果普及計画の成果如何にかかっており、効果普及のための手段として期待されていたのが、農村普及事業、農民会、農業協同組合であった。この三事業の実態を分析し、次のような結果を得た。

- (1) 農業普及事業：普及員の不足から生じた農民指導の不徹底という問題を、この計画は農民会を使つての集団指導で解決しようとしていた。しかし、農民会は、その当時1万5050人の会員を持っているだけで、その期待に応え得るだけの組織になっていなかった。
- (2) 農民会：政府と農民を結ぶ組織として期待されたが、この会の保護育成については全く考慮されず、農民の自主性にまかせていたため、会の発展は困難であった。
- (3) 協同組合：農業金融政策、土地政策(土地分配、土地改良=灌漑利用の促進)の二政策効果の普及組織として、生産信用協同組合、農業信用協同組合、土地改良協同組合、入植協同組合、土地年賦買受および借地人協同組合などの利用が考えられていた。しかしながら、これらの5種類の協同組合の組合員は、1962年当時、16万9451名に過ぎなかった。1960年センサスによると、タイ全国の農家数は約341万戸であったので、僅か5%であった。農業金融政策、土地政策をもって、この僅か5%の農民に政策効果を普及したとしても、農業問題の重要課題となっている土地、小作問題、農家負債問題などの解決策とはなりえないと指摘した。

以上の(C)計画を構成する三事業の実態から見て、(A)(B)計画の効果普及のための効果普及計画に対する配慮が十分に払われていないと述べている。

そして、本小論は次のように結論づけた。「生産向上計画(A)のうち、肥料の使用奨励、農耕技術の改善、品種改良と普及、農業の多角化などの諸政策の効果も、普及員の不足から十分に普及できず、また、灌漑施設を拡充しても、土地改良協同組合の未発達から十分に利用し得ない。さらに、農村社会・経済改善計画(B)においても、とくに現在の農民貧困化の要因から見て中心問題と思われる土地、小作問題、農業金融問題に対して、土地分配、農業金融組織の充実を意図し、その効果を農民会、信用協同組合を通じて普及しようとしているが、両組織の未発達からごく限られた一部農民に効果があるだけで、農民全般に効果を普及できない。このように、計画における生産向上計画も、農村社会・経済改善計画も、効果普及計画の不備から、十分にその効果を農民に達せしめることができないでいる。ここに、現在、この国農業開発政策が農村の現状とズレたものになっている直接的原因を見出すの

である。

第1次経済開発計画の前期3年終了時点(1964年)で、政府は、国民総生産、国民一人当たり所得において、それぞれ順調な伸びを示しており、計画の成果を歌い上げていた。しかし、全国民の80%を占める農民の生活は、旧態依然として慢性的貧困の中にあった。結局、このような状況に農民をおいているのは、農業開発政策が農村の現状とズレたものになっているからであると指摘して、この小論文は終わっている。

この論文をまとめる段階で、私が経験した事実を通して描いていたタイ社会の枠組みは大まかなもので、先述したとおり、タイという国、社会は近代国家を装いながらも、前近代的遺制を多く引きずっている国であり、社会であるといった程度のものであった。そして、タイ農民が貧困であるのは、経済的要因のみならず、前近代的遺制からの社会、文化的要因があり、この面が解決できない限り、所得を伸ばすための生産向上計画も成果があがらないであろうと、指摘しただけで終わっている。つまり、経済開発計画は、すでに長い歴史を通じていろいろ描かれた汚れているボードに計画案を描くようなものであって、真っ白な綺麗なボードに理想的な開発計画案を描くようなわけにはいかない。たとえ理想的な計画であっても、汚れたボードを無視しては、その成果は期待できないと指摘するにとどまっている。

全く未熟な論文ではあったが、この論文は私にとって忘れられない論文であり、私に総合的認識としての地域学の構築を目指す勇気を与えてくれた論文である。というのは、この小論文で、アジア経済研究所の昭和41年度『発展途上国研究奨励賞』を受賞し、「これからの東南アジア研究の方向を示す論文」として評価されているからである。

この小論文をまとめた後、タイの歴史、特に今日のタイ社会に大きな影響を与えているタイの旧社会(サクディ・ナー制社会)について、興味を抱くようになった。というのは、農村社会もその一部を構成するのであるが、前近代的遺制を引きずってきているタイ社会全体を把握して、その中に農村社会を位置づけ、社会全体との関わりで農民の貧困問題を考える必要があると考えようになったからである。

タイ旧社会の研究の成果として、現在のタイ支配階層の価値観と旧社会との関係を明らかにして、「東南アジアの価値体系1-タイ」(注6)で発表し、また、タイの反体制詩人チット・プーミサックの「タイ・サクディ・ナーの素顔」を抄訳し、体制派の政治評論家ククリット・プラモートの「タイ歴史」の抄訳を対比しながら、タイの旧社会を究明して、「タイのこころ」(注7)としてまとめ、出版している。

このタイの旧社会=サクディ・ナー制社会の考察を通じて、私のタイ・イメージ、つまり先取りするした全体が、かなりはっきりしたものになってきた。その大枠をもとにタイ社会の全体を描き出したのが、「新タイ事情(上・下)」(注8)(後に合本されて「タイ入門」(注9)と書名が変更されている。)である。

(注1) 田中忠治著：“タイ国経済開発の一考察 協同組合運動を中心にして”、「東京外国語大学論集」6号、東京外国語大学、17-30ページ。

(注2) 田中忠治著：“タイの農家負債問題”、「アジア経済」3巻2号、アジア経済研究所、22-39ページ。

(注3) 田中忠治著：“タイの農業開政策と農村の現状”、アジア経済研究所、研究参考資料第82集、1965年。

(注4) Paithum Khrua-Kaew: 「Laksana Sangkhom Thai lae Lakkan Patthana Chum Chon.」 Hang Han Suan Cam Kat Kan Phim Kua Kum, Bangkok, 1963, p.p.4/12-4/13. (『タイ社会の性格と農村開発の基礎理論』)

(注5) John F. Embree: “Thailand - A loosely structured social system.” in American Anthropologist, 52, 1950, p.184.

(注6) 河部利夫、田中忠治共著：“東南アジアの価値体系1-タイ”、アジア出版会、1970年。

- (注7) 田中忠治著：「タイのこころ」、文遊社、1975年。  
(注8) 田中忠治著：「新タイ事情 上・下」、日中出版、1981年  
(注9) 田中忠治著：「タイ入門」、日中出版、1988年。

### 地域のメカニズムの探索

私は、当時東京外国語大学で、「タイ事情講義」という授業科目を担当していた。その講義録を再編、整理して出版したのが「新タイ事情」の上・下本である。そこではタイ社会で生起する諸現象を把握する枠組＝メカニズムを探り、その枠組みにしたがって、タイ社会における政治、経済という動態的な領域に見られる規則性のようなものを、言い換えれば、歴史的な「流れ」＝歴史的に社会を動かして来た論理を把握しようとしたものである。この本で、地域学の基盤となる地域の総合的認識を初めて試みているので、その内容を紹介しておきたい。

この本をまとめようと思ったのは、それまでのわが国でとられてきた東南アジアへの接近方法に対する批判からであった。それまで東南アジアへの接近方法は、地域研究といって学際的手法を用いようが、用いまいが対象的方法か、方法論的方法のいずれかであった。そのいずれも納得のいくものではなかった。

対象的方法というのは、歴史家、地域専門家などによって多用されていたものであった。また、この方法は第二次大戦前から受け継がれて来ているもので、わが国における伝統的な方法であった。特定の対象として、政治、経済、社会、法制、思想、文化等、なにか一つの領域を取り上げ、その対象領域に応じて、既存の学問体系を使用しながら、たとえば経済領域を対象として取り上げたら経済学を使用するようにして、その対象領域を解明するという方法である。

この方法は、分析用具としてのカテゴリーや作業仮説の精密化に関心を持たず、また、領域相互の関係の解明にも関心を持たないのが特色である。したがって、この方法による研究は、それぞれの領域について深く解明するが、完全な個別領域の解明にとどまってしまって、対象領域とその他の領域との相互関係は、全く無視されてしまうところに限界があった。

方法論的方法というのは、アジアを専門的に研究する分野からでないところから出てきた方法である。特に理論的に鍛え上げられた作業仮説を持つ、文化人類学、社会学、社会心理学、近代経済学などの分野から出てきている。この方法による東南アジア研究は、自己の作業仮説---それは、西洋社会を素材として構築されている---が、全く異質な東南アジア社会を素材として、どこまで検証に耐え得るかを見極めたいというアカデミックな欲求で行われている場合が多かった。

この方法による研究は、普通、ある社会の断面をみながら、学問の基本概念に必要な要素を抽出して、その相互作用を研究するという方法で行われる。したがって、この方法は、先の対象的方法の欠陥を埋めるともいえるものであるが、この方法にも問題がある。この方法では、西洋社会を素材として構築された枠組みを東南アジア社会にあてはめて研究しようとするのであるが、先述した通り、その主目的は、枠組みの検証であって、その検証に必要な素材だけが抽出されるために、この方法での研究は、東南アジアの特殊性、個別性、いかなれば東南アジアの血肉が欠落してしまうことになる。また、この方法による研究では、西洋社会と東南アジア社会の相違が明らかにされるだけで、東南アジア社会そのものは解明されることがないといえよう。

以上二つの方法論とも欠陥があった。対象的方法では、社会を構成する各領域のバラバラの知識しか得られず、領域相互の関係が分からないため、東南アジア社会の実体に迫れないし、方法論的方法では、断面的な領域相互の関係がわかっても、東南アジアの血肉が欠落してしまうという欠陥があった。

私は、このような方法論の欠陥を是正すべく、総合的方法をこの本で提唱した。まず、東南アジアは西洋社会と文化的に異なる社会であるとの認識に立って、東南アジアの特殊性



(固有性)を重視し、東南アジアの各国社会は独自のシステムで動いているとみる。この独自のシステムの究明が、この方法の主目的となる。もちろん、従来の対象的方法による研究業績を十分に活用して知識の総合化を図り、方法論的方法による社会全体を構成する諸領域の相互関係を参考にしながら研究をすすめるなければならないのはいうまでもない。

この接近方法として、総合的方法を提唱したのは、これによって東南アジア各国社会の独自のシステムというものが捉えられると考えたからである。それができれば、東南アジア各国社会で生起する社会現象を、一つの流れの中に位置づけ、全体社会に関連づけながら認識できるようになり、過去から現在、現在から未来へと社会の動きをある程度把握できるのではないかと考えたのである。

この「新タイ事情」を書いている当時は、自分の研究は、あくまで対象地域をアジアにおいての「地域研究」の一環であると捉え、地域研究のディシプリンを模索していた時代であった。ここで提唱した総合的方法は、すでに触れた地域学の方法論の土台となったのであるが、この本の中では地域学なる言葉はどこにも現れない。

さて、ここで提唱した総合的方法によって、タイ社会の仕組みをどのように捉え、その仕組みを動かす論理をどう捉えたか、その概略を紹介しよう。

社会現象は、社会を構成する諸個人の行為、行動の集積であり、その諸個人の行為、行動は、社会の仕組みの中で動機づけられるとの認識に立って考察している。その動機づけの仕組みは、その社会の階層構造がどうなっており、その階層を支える文化がどのようなものであるかを知ることによって、階層の利害関心が分かり、それぞれの階層の利害関心の絡み合いが、諸個人の行為、行動を動機づける仕組みとなり、それが社会の仕組みということになると考えた。それで、社会の仕組みの考察にあたって、タイ社会の階層構造と階層を支える文化、さらに階層間の利害関係のあり方を探っている。

タイ社会の階層構造は二つの側面を持っているとみている。一つは伝統的な名誉、威光といったものを規準にしての身分的階層的側面であり、もう一つは資本主義の浸透以来形成をみた利潤を規準とした営利階層的側面である。身分階層的側面からみれば階層は支配、被支配の階層となり、営利階層的側面からみれば国王を頂点として、官吏、軍人の上層、華僑を中心とする中間層、そして農民大衆からなる下層と三つの階層に分けられる。

身分階層というのは非合理的な観念的利害関心で結びついている階層であり、営利階層というのは合理的利害関心で結びついている階層である。本来、両者は相矛盾するため、絶えず緊張関係に立つのが普通である。この両階層が相争って、最終的には後者、すなわち物的利害関心で結びついた資本家層と労働者層といった階層が優位に立つようになる。それが近代資本主義社会の姿である。しかし、タイではこの緊張関係が生まれていない。

身分階層的側面と営利階層的側面の両面から、どのような利害関心でそれぞれの階層が結びついているかを考察している。

身分階層的側面からみた場合、支配 - 被支配の二階層は、都市と農村という型で、地理的に分割され、文化的にも隔離した状態にあると指摘している。すなわち支配階層は都市にあって、サクディ・ナー制社会の統治理念であったバラモン文化を土台として、その時代、その時代の海外の優勢文化を摂取し、文化的に漂流してきたとする。そして、一方、被支配階層は、農村にあってアニミズム信仰を中核として、支配階層が摂取する文化を取捨選択しながら、混淆文化を作り出してきたとみている。

この文化的差異は、両階層の価値観に影響を与えることになり、支配階層は旧社会の特権階層的意識をもって、自らの文化的優越性を誇示することに価値をおき、一方、被支配階層はタイ語でいうと「クワーム・ユー・ディー・ギン・ディー」(“平穏なる日々”)に価値を見いだして生きてきた。この異なる価値観を同時に充足せしめる媒介となっているのが、国王と仏教を結びつけた国体論の体系、タイの国体神話であって、慈悲深き国王による統治とそれへの報恩を骨子とする国体神話が、専制君主制が崩壊した今日も生き続けており、この慈悲 - 報恩の論理が両階層の価値を充足せしめているとみている。

身分階層的側面からみた支配 - 被支配の二階層の観念的利害関係は、慈悲深き国王、そし

てそれを取り巻く支配階層が、被支配階層の平穩なる日々を保護してやる。それに対して、被支配階層は絶対的に服従するという形で、その恩に報いるという関係になっているとしている。(ここでは、国体神話から慈悲 - 報恩を析出しているが、後に王制イデオロギーによる秩序意識の形成の観点から、より精密な分析を試みるようになっていく。)

営利階層の側面から官吏と華僑、農民と華僑がどのような物的利害関係に立っているかをみている。官吏と華僑の間には、官吏が華僑の経済活動を保護し、華僑が官吏に利益を分配して、その恩に報いるという共生関係があり、華僑と農民の間には、華僑が農民の経済生活を保護し、農民は華僑に、自分の生産物からの利益を分配して、その恩に報いるという共生関係があることが分かった。つまり、営利階層の側面からみた階層間の物的利害関係も、身分階層的側面からみた支配 - 被支配の二階層間の観念的利害関係と同様に、上が保護し下がその恩に報いるという関係になっている。このことは営利階層も観念的利害で動いていることを裏付けるものであるとしている。

その結果、タイ社会は、支配 - 被支配の二階層からなり、今でも、身分階層(身分制度は制度的には廃止されているが、実質的に受け継がれているとみる)を主軸にして動いている社会と捉えている。つまり、西洋資本主義のインパクトを受けて営利階層が生まれ、それまでの身分階層内部に混乱がみられたが、結局は、身分の固定化という形で、それが決着してしまい、身分階層が、実質的に温存されてきてしまったとみている。

タイが身分制社会から脱し切っていないとすれば、なぜ、西洋資本主義の浸透を受けながら、資本主義的発展、いふならば、身分制社会から資本制社会への転換ができなかったのかという疑問が出てくる。それに対して、その転換の担い手となる、いわゆる市民階層(ブルジョアジー)が生成しなかったからでないかという観点から、それが生成しなかった原因を、内生的、外生的二面から究明している。

内生的原因として、政府の小農育成政策によって、農民は小農に再生産されて生産力が低いまま固定化されて、産業資本家が生成するような基盤が農村社会になかったということも挙げている。また、外生的原因としては、古くからタイに渡来し、商人として活躍し、中間的商人階層としての役割を果たして来た華僑が、支配階層への吸収政策によって、政治寄生的資本になってしまったこと、いふならば経済の伝統主義化(非合理化)が行われ、華僑の経済活動が独立、自由な合理的なものになり得なかったことを挙げている。

身分社会から脱しきっていないということになれば、旧社会であるサクディ・ナー制社会における生産様式が生き続けていると想定され、それが、身分の固定化、経済の伝統主義化はすでに指摘しているが、その他、伝統の法制化、慣行の固定化等を通じて、常に支配階層に利益をもたらす働きをしていると指摘している。

このような社会と捉えれば、今日における生産の組織者は、旧社会からその地位を継承してきている今日の支配階層ということになる。ということは、タイ社会は、この生産の組織者である支配階層の支配のあり方、政策によって動かされているということである。そうとすれば、タイ社会の動き、すなわち「流れ」を決定づけているのは、支配階層の思考、行動、態度の基準となっている価値観ということになる。

そこで、支配階層の価値観の析出を行っている。まず、支配階層が、その社会的地位から分有するにいたっている価値観としてナーイ観念(政治権力を至上とする観念、優越種族的観念、その裏返しとしての愚民思想)をあげた。これはタイの階層構造を基盤として形成されている観念で、かつて支配階層はナーイと呼ばれていたことから、このように呼称した。

次にタイの支配階層が、その社会的役割を通じて獲得する価値観として、リアン観念(親子、あるいは親分 - 子分関係にみられるような温情主義的保護観念)をあげた。これは支配階層が属する行政組織を通じて分有するに至っている価値観である。

そして最後に、タイの支配階層が、タイ社会の構造的特徴から分有するに至っている価値観として、サヌック観念(楽しむ = 私的欲求の充足を強く願う観念)を挙げた。この観念は、タイの社会構造から国民一般が分有するに至っているものであって、支配階層だけの価値観として限定されるべきものではない。しかし、この観念の内容が支配階層と被支配階層では

ことなるものなので支配階層の価値観の一つにあげている。

この三つの観念こそが、今日のタイ社会の「流れ」を作り出しているものであり、またタイ独自の論理を構成するものであると指摘した。そして、この三つの観念が作り出した「流れ」にタイの事情、すなわち政治、経済面の事象を位置づけ歴史的に考察しているのが「新タイ事情」である。その詳細は、直接関係がないのでここでは省略したい。

## まとめ

この後、私は地域学の方法論を探求することになるが、それと関係があるので、この書でのタイ社会の総合的認識のあり方をもう一度整理して置くことにする。ここでの総合認識は、タイ社会の政治、経済の現象に共通して流れている論理を探るという形で行なわれている。まず人間の行為、行動を動機づけるものとして階層構造を捉え、階層を支える文化を通して階層間の利害関係のあり方を探り、資本主義の浸透とともに形成された営利階層も、伝統的身分階層の観念的利害で動かされているのがタイ社会だとする。そして、その観念的利害を生み出す二階層の文化的背景はそれぞれ異なるため、両階層の価値観の相違を指摘している。この価値観のギャップを埋めて、社会的秩序が維持できているのは国体神話があるからであり、国王が存在するからであるとしている。そして、支配階層の伝統的価値観からの論理が、タイの政治、経済は動かしていると結論づけている。

この論文は、私にとっていくつかの問題を残した。特に、大きな問題は、1) 地域研究は「文化相対主義に立って、対象地域の歴史、文化の固有性を重視して、内部から社会の総合的認識を意図するものである」としながら、西洋社会の展開過程と比較して、西洋社会との異質性を指摘しているのみで、対象とする社会の内部からの社会認識になっていないということ。2) 政治、経済の諸事情を支配階層の固定的な伝統的価値観を「流れ」として捉え、それをもって政治、経済の諸事情を捉えようとするのは、あまりにも静態的で、社会の発展、社会の変容を無視した社会認識であり、当初目指した動態的認識とはかけ離れたものになっていること。

この2点を克服するための作業は、対象とする地域であるタイの自然、歴史、伝統、文化の固有性の検証から始まった。その作業結果の一部は、「タイ - 歴史と文化」(注1)としてまとめている。この本は、その後の研究の序章部分にあたるものであった。そこでは、サクディ・ナー制社会の考察を通じて、イデオロギーと価値観の関係、また価値観と秩序意識の関係、さらに特殊な社会関係の生成などの分析を行っている。その考察を踏まえて、タイという地域のシステムの解明、すなわち、タイという地域を構成する諸行動単位の相互依存関係の究明という、私の地域学を本格的に模索するようになる。

この当時、私が求めた地域学は、文化相対主義の立場から伝統的文化を考察の中心に置いていた。この場合の文化とは、そこに住む人たちの生活様式、生き方の全体と広く考えていた。そこでは思考様式、行動様式の基準となる価値観が重視されるのはいうまでもない。ある国の全体とは、この伝統的文化と社会との関係をもって描き出せるのではないかと考えたのであるが、この場合伝統的文化を固定的、不変的のものと考えての社会認識が、静態論に陥らせることになったのである。その反省に立って、伝統的文化と社会変容(変動)という視点から、考察の枠組みの再構築を図るようになる。その結果として到達したのが、冒頭で述べた地域の特殊性と普遍性の両面から接近しようとする地域学の方法論である。この方法での研究成果は、次の機会に発表することにしたい。

(注1) 田中 忠治著:「タイ - 歴史と文化」、日中出版、1988年。





